

附属図書館

第1章 附属図書館の沿革

第1節 大学設置前の図書館

本学の母体となった富山高等学校、富山師範学校、富山青年師範学校、富山薬学専門学校、高岡工業専門学校の図書館は、各学校長のもとに管理運営されており、それぞれに固有の歴史と伝統を有していた。

また図書館の管理運営の理論方法は言うに及ばず図書館資料の標準的な整理技術も確立されていない時代であり、たとえば、図書の分類法一つをとっても同じものではなかった。他方、蔵書数を見ると全体合わせて約11万冊、現在のおよそ8分の1の規模であった。

このように独自の歴史をあゆみ、別々の理念のもとに運営されてきた図書館を全く新しい理念で一つに統合し、再出発したのである。これはまさに改革と呼ぶに相応しい大事業で、単なる組織機構の統合に留まらず図書館職員の意識の改革と統合をも求められるものである。この過程では様々な難題に直面したことであろう。たとえばある館の先人たちが長年のたゆまぬ努力で築き上げ、そして後進が大事に守り続けてきたものを根底から否定することもあったに違いない。新生図書館への出発がいかに困難を極め苦渋に満ちたものであったかは想像に難くない。

第2節 大学の発足と図書館

昭和24(1949)年5月31日、本学が設置されるや、大学の母体となった5校の蔵書と職員を包括して附属図書館が設置された。

図書館本部は当初、大学本部の在る富山市奥田の薬学部建物の一室に置かれ、文理学部、教育学部、薬学部、工学部にはそれぞれ分館が置かれた。館長、分館長は教官の併任とし(薬学部分館は事務官)、

本部事務部に事務長のほか、庶務、司書の2係長、分館事務部に事務主任が配置された。

8月1日に至り初代館長に文理学部教授高瀬重雄氏が就任し、8月31日図書館本部は文理学部内に移転、文理学部分館を統合解消して本館と改称した。また、同日塩谷孝治郎氏が初代事務長に就任、9月9日には定員22名を充足して部局としての体制を形作った。特に鳥山学長ならびに高瀬館長の尽力によって、独立年間予算を持つとともに、人事についても独立部局としての体裁を早く整えるようになった。このことは以後の図書館の発展に大きく裨益したのである。

第3節 本館・分館の統廃合

戦後、アメリカの教育方式が滔々としてわが国に移入され、それとともに入ってきたアメリカの近代的図書館管理方式は、おしなべて希少な図書の保管管理に徹していた日本の大学図書館界に大きなインパクトを与えた。日米図書館事情の落差が余りにも大きかっただけにその衝撃もまた甚大であった。図書館事情の後進性においては本学もその例外ではなく、戦争で受けた痛手からの復興と統合後の図書館振興のためには、まず機構の確立、施設の整備、蔵書の充実、目録の統一など数々の課題と取り組まねばならなかった。幸い、大学創設当初から、図書館を人事、予算等の面で独立部局として育ててゆくという大学当局者の適切にして果敢な措置は、これらの課題解決とその後の図書館の発展にとって大きな力となった。なおここで特筆すべきことは、富山大学設置期成同盟会が本学の育成に努力を傾注し、後記する新館建築のほか、蔵書の充実に支援の手を差し伸べたことである。初年度以降38年度まで図書購入費として1,312万3,000円の寄付を受け、設置当時10万9千冊余であった蔵書は、昭和38(1963)年に

は20万冊を超えるに至ったのである。

(1) 本館の新築移転と教育学部分館の統合および
文理学部分室の存置

昭和29(1954)年経済学部が設置されるや、富山大学設置期成同盟会によって五福地区に経済学部と附属図書館の建築が企画され、同年4月20日文部省との第一回打ち合わせを契機に数次の建築委員会の協議を重ねて、同年10月に着工、二期にわたる建築工事も順調に進み32(1957)年3月19日に竣工した。

同年2月積雪について移転を開始し、前年経済学部の独立の際、高岡工学部分館から蓮町地区に移動した経済学部関係図書と共に、同年3月31日をもって五福地区新館への移転を完了し、また同時に五福地区の教育学部分館は本館に統合され、蓮町地区文理学部に文理学部分室が存置された。

(2) 薬学部分館の移転と薬学専門図書室の設置

昭和34(1959)年ころから商議会では、五福地区への移転集中後における図書館組織の在り方として、本館のもとに薬学と自然科学の専門図書室を置き、適正な集中的管理とサービスポイントの分散を

図ることで、それぞれが特色ある図書館機能を発揮し得る全学的な図書館体系を考えていた。

昭和37(1964)年薬学部の移転が決定するや、薬学部新校舎内に図書室が設計され38年3月第一期新校舎3階の北隅に総面積67坪(書庫25坪、閲覧室34坪、事務室8坪)の図書室が完成した。そして薬学部分館は38年11月中旬移転作業を開始し、当月末までに図書18,200冊、書架等の物品160点を運搬し整理も滞りなく完了した。新しい図書室は、39(1964)年の機構改正で名称を薬学専門図書室と改め名実ともに再出発することになった。

(3) 新図書館建築

学部の五福集中化、教養部の発足、18歳人口増加による学生定数増など、サービス対象者および蔵書冊数の増加は、開架図書配列スペースの不足、閲覧室や書庫の狭隘化をもたらし、図書館サービス活動の様々な局面で有形無形の支障をきたしていた。この行き詰まった状況を切り開くためには増築が是非とも必要であったが、一つの建物を学部と共用する状況では種々制約があつてなかなかその実現の見通しが立たなかった。そこで独立した新図書館建築の必要性とそれを求める気運が強まり、昭和47(1972)

回 想 録

関 場 貞 子

富山高校図書課に勤務したのは昭和21(1946)年5月末、課長(教官)係長、女子2名の計3名でした。先づ三階建の書庫に案内され、膨大な数に圧倒、大型の図録、全集物、帙入の和装本、洋書の数、等々総てが新鮮で驚きの連続でした。学生の試験時期ともなれば閲覧室は満席、貸出、閲覧も多く閉館間際まで出納事務も、迅速さを要求されました。漸く業務も軌道に乗れた頃、「富山大学設置期成同盟会」が昭和24(1949)年5月31日発足し、富山高校、富山師範、青年師範、富山薬専、富山工専の蔵書、職員を包括して附属図書館が設置され、薬学部の一室に図書館本部を設け、文理学部、教育学部、薬学部、工学部の各学部には分館がおかれしました。8月に文理学部高瀬重雄教授が初代館長として本部を文理学部に移転し、文理学部分館は統合して「本館」と改称されました。昭和29年経済学部の独立に併い工学

部分館の経済学関係図書の文理学部への移動でヘルン文庫内廻廊下に梱包のまま配列されました。一方五福地区には経済学部と附属図書館の新築工事を同年10月着工、二期にわたる工事も順調に進み、32(1957)年3月19日竣工し、工学部分館からの経済学関係図書と共に本館も移転し、五福地区の教育学部分館も統合され、蓮町地区には文理学部分室が存置されました。待望の文理学部五福集中も昭和36(1961)年となり新館への移転に湧き立ちました。

其の間本省からの通達で図書館職員の“司書および司書補の講習”15単位以上取得すべく三回位に分け受講する機会に恵まれ、木寺清一先生の目録法、分類法、裏田武夫先生の図書館学等、興味深く其の後の業務の自信に繋げた事に対し、図書館に感謝の念を新たにした事を思い起こして居ります今日このごろです。

年12月、現在地に鉄筋3階建ての中央図書館が竣工した。翌年正月から引っ越しを開始し、開架閲覧室、書庫の整理等を行い、4月の新学期開始に合わせて開館した。

この間、時間外閲覧サービスと文献複写サービスを開始している。昭和34年、夜間授業の経営短期大学の併設に対応して、閲覧時間は休業時を除き午後8時まで、土曜日午後3時半まで延長された。これは全国に先駆けた時間外開館の実施であった。また、昭和34年ころから校内教官を対象とする文献複写サービスを実施していたが、昭和48(1973)年7月から文部省が定めた複写料金に基づく学内および学外へのサービスを開始した。

(4) 組織およびサービス体制の整備

昭和49(1974)年10月に薬学専門図書係を廃止して、代わりに本館に参考係を新設した。この薬学専門図書室は、薬学部富山医科薬科大学移行に伴って昭和54(1979)年3月に廃止された。

昭和60年度に情報処理センター機を主機とする図書館業務電算化を図り、貸出返却業務、目録作成等の電算処理を開始した。同年10月工学部の五福地区移転を機に、工学部分館を廃止して工学専門図書室を設置し、併せて工学部分館係を廃止して本館に学術情報係を設置した。以後この係が図書館電算システム構築の要として機能していくこととなる。図書館電算機システムを昭和61(1986)年3月から学術情報センターに接続し、図書・雑誌の全国共同目録データベースへ書誌・所蔵データの登録を開始するとともに、ネットワークを介した他大学図書館の目録情報利用の実用化を図った。平成元年度には図書館専用電算機のレンタル料が予算化され、平成2(1990)年2月から新図書館情報システムの運用を開始した。引き続き、ニューメディアの普及等に対応して、平成4年1月に文部省配分予算でCD-ROMサーバシステムを導入し、また同年4月から外部データベース利用による情報検索サービスの拡充を行った。さらに平成6年2月UNIX機による新コンピュータシステム導入を機に、図書・雑誌の書誌と所在情報をコンピュータ端末機を介して検索するシステムであるOPACをキャンパス情報ネットワークに公開するとともに、久しく望まれていた

研究室からOPACへの24時間アクセスを実現した。また、これまでに電子化した様々な情報はインターネット上で公開している。

図書館管理の効率化・活性化と利用者サービスの拡充を図るため、平成7年度に事務組織を情報管理課(図書館専門員および総務係、図書情報係、雑誌情報係)並びに情報サービス課(情報サービス係、参考調査係、学術情報係)からなる事務部制に改編した。一方、人員配置ではこれまでの定員削減計画が着実に進行し、加えてさらなる削減が見込まれている。こうした人的資源の全体的縮減基調のもとで、大学改革に合わせた図書館運営や提供サービスの見直し、またサービスの質的向上ならびに図書館機能の強化高度化などを始めとする図書館の改革が強く求められている。

このような厳しい環境下にあってもサービスの拡充には不断の努力を続けており、その一例に生涯学習支援サービスを取り上げ記しておく。生涯学習社会の進展に伴う、大学図書館公開への社会的要請に応え、平成8(1996)年4月から一般市民等学外利用者への図書館資料の貸出を始めるとともに、日曜開館を開始した。これらのサービスは従来の学生、研究者等校内利用者を主たる対象とするサービスに留まらず、地域に開かれた大学の図書館として、企業や市民個人の情報ニーズにも積極的に応え、情報獲得を支援していくもので、国立大学図書館の新たな機能として重要な意味を持つものである。

(5) 増築と図書館機能の強化高度化へ

学生数の増加、それに伴う閲覧座席数やフロアの不足、また年々累積される蔵書によってもたらされる書庫の狭隘化などによって、求められるサービスも思うにまかせぬ状況に至り、これら諸問題の解決と新たなサービスの展開のために増築が強く求められていた。しかしながら学内事情等によって容易には実現を見ず将来が憂慮されていた。ところが急遽、平成8年度第二次補正予算で計画が認められるところとなり、平成9(1997)年2月に6階建て約4,900平方メートルの増築が完成した。既設建物の改修と合わせて装いも新たに、5月にサービスを開始した。

新図書館では、利用者サービス用の情報コンセン

トを配備し、またマルチメディア研修室、マルチメディアコーナーを設けるなど、近年著しい情報の電子化への対応が図られた。そして、学生の自学自習の意欲と利便性を高めるため、利用者が書架上の図書に自由にアクセスできる全面開架方式を全館にわたって採用したり、ビデオブースやグループ閲覧室を備えたりして、学習図書館機能の向上に努めるとともに、学術雑誌専用フロアである2階・3階に設置した電動集密書架には研究室等から集めたバックナンバーを配架して、学術雑誌の共同利用化促進による研究図書館機能の強化を図った。さらに、開学50周年記念事業である年史および写真集刊行の事務を担当する年史編纂室が館内に置かれたことに伴

い、本学や他大学の刊行物等を収集提供して、年史原稿執筆者を支援するほか、将来的にも大学関係情報を網羅的に収集し利用に供する目的で大学資料室を設けている。

このほか新たに作られたヘルン文庫には保存庫のほかに閲覧室を設け、またハーンの旧蔵書を良好な状態で保存するための各種装備が施され、貴重資料の利用と保存管理にも十分な配慮が払われている。さらに書架間の間隔や閲覧室通路幅も広く設計されるなど、開放感のある快適な利用環境作りの点でも創意工夫が見られる。このように、増改築後の図書館では、情報化社会への対応や各種サービスの拡充など図書館機能の高度化が図られるようになった。

第2章 施設・設備

第1節 五福地区に図書館本館を竣工

昭和29(1954)年、経済学部が設置されたことに伴い、昭和32(1957)年五福地区に経済学部と附属図書館(延べ2,417平方メートル)が併置して建てられた。

建物は、鉄筋4階建て1階、2階および4階の一面を図書館の資格面積に準じて、それぞれの階に事務室、開架閲覧室およびヘルン文庫と視聴覚教室を設置した。学生閲覧室は木造(2階建て)で別棟として建物に併設され、学部と共用した。書庫は6階から成り、蔵書数に較べて収容能力は高く、開架図書スペースが狭隘で、大半の図書は書庫に収められ、保存機能を優先した施設であった。

表1 施設面積

	書庫	閲覧室				事務室	その他	面積計	座席数計
		学生閲覧室		教官閲覧室					
		面積	座席数	面積	座席数				
本館	943	348	200	52	20	160	914	2,417	220
薬・専	83	110	36			28		221	36
工・分	244	129	72	25	12	58	104	560	84
計	1,270	587	308	77	32	246	1,018	3,198	340

第2節 新図書館の建設

五福地区統合計画により、文理学部、薬学部が五福地区に移転し、集中化が図られた。加えて、学部改組や学科増に伴い、サ・ビス・スペースの不足、蔵書数の増加による図書配架スペースの狭隘化、また利用者サ・ビスの拡充を図るため昭和47(1972)年12月、大学の中心に位置する現在地に独立した附属図書館が竣工した。

建物は、鉄筋3階建て(延べ面積4,849平方メートル)で総面積は、旧館の約2倍となり、また、開

覧スペース(956平方メートル)および座席数(530席)は約3倍となった。書庫は、積層(4層)で40万冊を収納可能となり大学図書館の機能強化が図られ、昭和48(1973)年4月から図書館業務を開始した。

その後、中央図書館には、昭和57年度地図情報室を設置、また、同年にブックディテクション(盗難防止装置)の導入を図った。さらに、昭和60(1985)年4月から図書館電算化に伴う目録検索コーナー、平成3年度CD-ROMコーナー、平成4年度ビデオコーナー等の設備を整え電子的図書館機能の整備充実に努めた。

表2

本館	工学専門図書室
構造:鉄筋コンクリート(3階建)	構造:鉄筋コンクリート
面積:延4,849平方メートル	面積:延638平方メートル
閲覧座席数:530席	閲覧座席数:95席
竣工:昭和47年12月	竣工:昭和59年3月
開館:昭和48年4月	開館:昭和60年10月

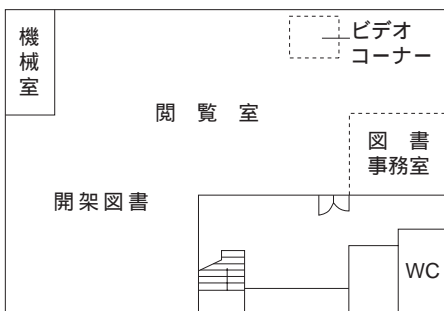
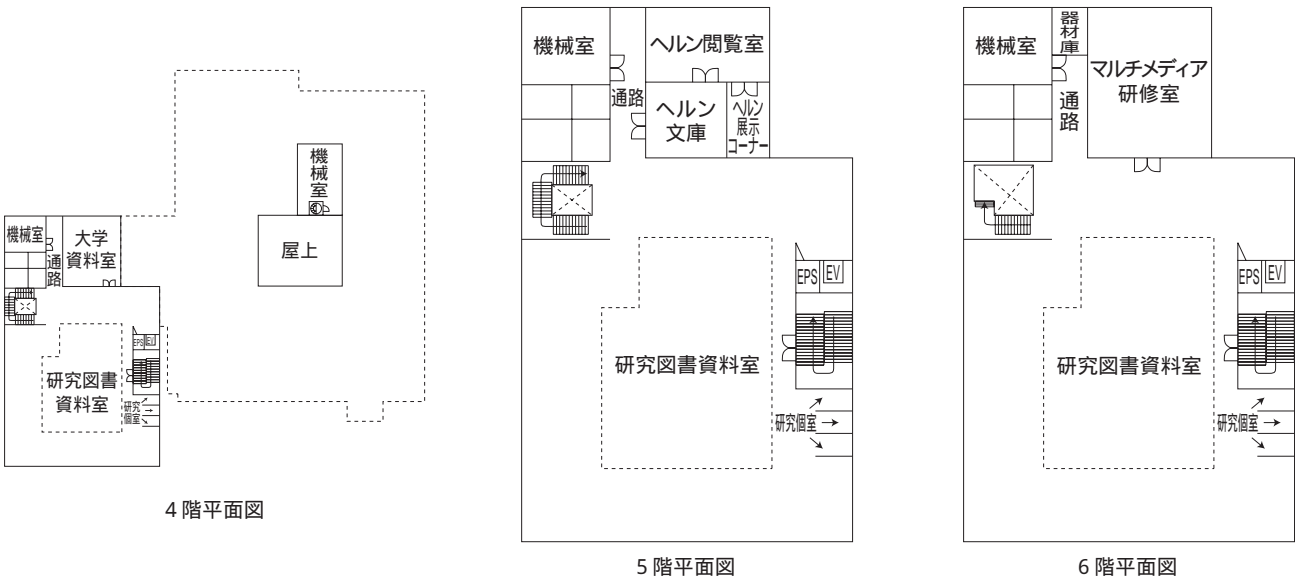
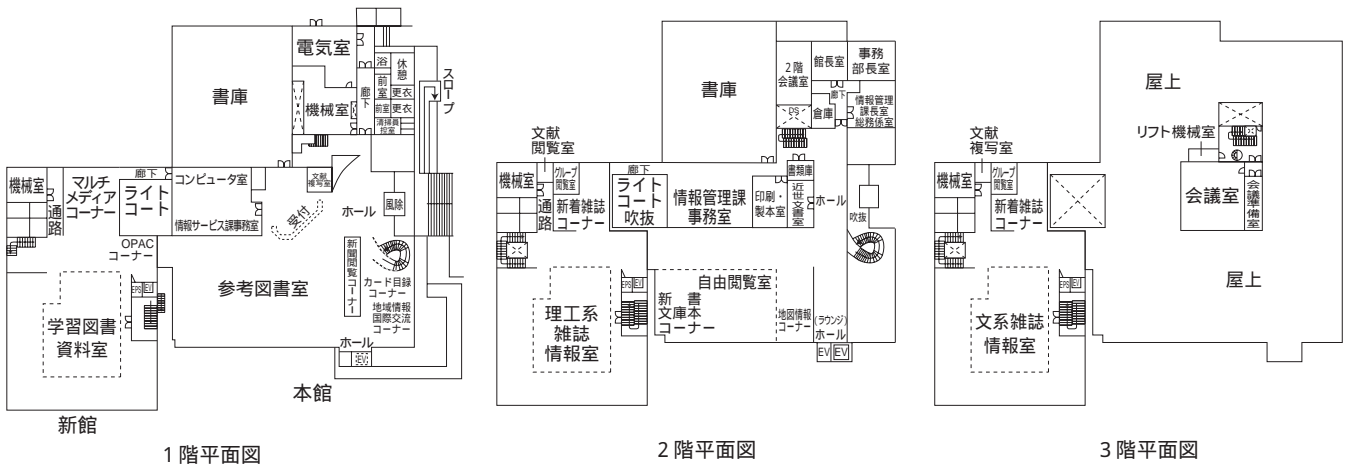
(1)本館施設面積

1階		2階		3階	
玄関ホール	128	自由閲覧室	426	視聴覚室	118
開架閲覧室	530	地図情報室	34	電算機室	24
カード目録コーナー	50	ビデオコーナー	34	その他	159
書庫(2層)	828	ヘルン文庫	34		
教官閲覧室	67	印刷製本室	44		
マイクロリーダー室	7	書庫(2層)	836		
文献複写室	16	図書情報・雑誌			
ロッカー室(学生用)	22	情報係(事務室)	214		
情報サービス係		新聞コーナー	50		
参考調査係		ホール	167		
学術情報係(事務室)	167	会議室	58		
その他	563	館長室	34		
		事務部長室	36		
		総務係(事務室)	44		
		その他	168		
計	2,369m ²	計	2,179m ²	計	301m ²

(2)工学専門図書室施設面積

開架図書・閲覧室	556
図書事務室	49
その他	33
計	638m ²

図 1 平面図



第3節 本館の増築・改修

大学図書館機能の強化・高度化の推進を基本理念として、平成6（1994）年にまとめた「附属図書館の現状と課題」をもとに課題とした諸点に検討を加えて、同年に「学術情報化図書館の再編成に向けて」を作成し、将来構想を策定した。そして、平成8年度第2次補正予算で増築（6階建て4,900平方メートル）が認められ、既設建物と併せて総面積（9,035平方メートル）は、大幅に拡充した。本館の改修に当たり、1階ホールに壁画や大理石丸柱の取り付け、そして曲線型カウンター等学習環境の整備充実に努めた。また、新館について、6階マルチメディア研修室に利用者教育用端末（30台）を備え付けた。1階のOPACコーナー、マルチメディアコーナーに検索端末を集中化し、情報検索環境の充

実を図るとともに、各階にも検索用端末を配置し、開架図書探索の利便性を図った。さらに2、3階に電動集密書架の設置により学術雑誌を集中管理し、教育・研究・学習支援体制の整備充実に努めた。新館のサービス関係施設面積は次のとおりである。

表3 新館施設面積

1 階		2 階		3 階	
学習図書資料室	511	理工系雑誌情報室	511	文系雑誌情報室	511
マルチメディアコーナー	92	新着雑誌コーナー	71	新着雑誌コーナー	71
その他	231	グループ閲覧室	21	グループ閲覧室	21
		その他	231	その他	231
計	834㎡	計	834㎡	計	809㎡
4 階		5 階		6 階	
研究図書資料室	511	研究図書資料室	513	研究図書資料室	513
大学資料室	92	ヘルン文庫	29	マルチメディア研修室	92
その他	206	ヘルン閲覧室	43	その他	204
		その他	224		
計	809㎡	計	809㎡	計	809㎡

第3章 管理運営

第1節 事務組織の変遷

(1) 図書館本部事務部に庶務係および司書係を設置
昭和24(1949)年5月31日、富山大学の設置により、附属図書館もその前身5校の所蔵していた蔵書およびそこに従事していた職員で発足した。

当初図書館本部は大学本部のある富山市奥田の薬学部に移された。文理学部(富山市蓮町)、教育学部(富山市五福)、薬学部(富山市奥田)、工学部(高岡市中川)には、それぞれ分館が置かれ、各館の管理運営を総括する館長、分館長が置かれたほか、

本部事務に事務長および庶務、司書の2係長、分館事務には事務主任が置かれた。

(2) 初代の館長と事務長の就任

昭和24年8月1日、文理学部教授高瀬重雄氏が初代図書館長に就任、次いで8月31日に塩谷孝治郎氏が初代事務長に就任した。9月には本館10名、教育学部分館6名、薬学部分館3名、工学部分館3名の定員22名で構成される事務組織体制を整えた。

なお、分館、本館の建物はいずれも前身の図書館を引き継いでいたが、教育学部分館は五福にあった旧富山連隊兵舎を改装したものであった。

附属図書館増改築について

瀧澤 弘

増改築の経過や面積の数値等は、別に記されているので割愛し、思い出を中心に記すことにする。

図書館が狭い事は知っていたが、94年2月に館長に就任して、実情を見て驚いた。書庫の図書は横積みされ、探すのも困難。研究室からの図書返却にも困る状態で、もう図書館機能の限界を越えていた。文部省で実情を訴え増築を要求したが、答えは「狭いは増築要求の根拠にならない。全国の図書館全てが狭いだから。また富山大学全体の意思での図書館増築要求がなければ……」であった。

とすれば、上記の2点を解決すれば増築は可能！と思った。以後事務長や職員の叢智を集め事務局の協力のもと、まず二十一世紀の大学に相応した電子情報機能を持った図書館の未来図を、一方で「機能強化検討専門委員会」等を構成して、学内で図書館増改築が焦眉の急であることを、あらゆる場所と機会を通じて説得してまわった。

当時の小黒学長の理解を得て、漸く学内でも増築が急務である事の理解と協力が得られた頃、同様に狭くなった工学部専門図書室も増築をとの強い要求が出された。事情は分かるが、同時増築要求は不可

能、何度か工学部委員や工学部長にも事情を説明し、本館増改築を先行させることの理解を得た。

95年度補正予算で増改築が認められた。夏の増改築に備えた書庫の整理は40度を越える庫内での作業だったが、職員の流した汗は爽やかだった。

翌96年3月工事開始。8月の本館改修工事は予想以上に酷く、当時の手帳に「空調ナシ・窓ナシ・風ナシ・水ナシ・トイレナシ・埃よけのダクトあれど埃モウモウ・騒音酷し・職員の執務不可能・連日猛暑」などの書き込みがある。それでも職員から苦情を聞かなかったのは「これで図書館は良くなる」の希望があったからだろうか。職員に当時の後遺症が出ない事を願う次第。

翌97年2月竣工、5月に竣工記念式典。同日夕方ポケットマネーを出し合っただけの内祝いの場の職員達の笑顔は忘れられない。玄関ホールのタイルの壁画は大成建設デザイン部作成の図案から図書館職員の投票で選んだもの。地震の際も崩れないよう裏で一枚づつ針金で止めてある。壁画の左下の年号と「あけぼの」の達筆は当時の小黒学長にお願いしたもの。永く学生教職員の眼の保養になることだろう。

(3) 本館事務組織の改組

昭和29(1954)年、文理学部経済学科が経済学部として昇格独立するに際して、旧高岡高等商業学校のあった高岡市と五福地区に設置を希望する富山市から誘致の働き掛けがあったが後者に決まり、昭和31(1956)年7月、五福地区に経済学部と附属図書館を合わせた校舎が竣工した。

このため昭和32(1957)年4月、文理学部にあった本館は五福地区に移転し、同キャンパスにあった教育学部分館を併合、そして蓮町の文理学部分館を本館の分室に改めた。これにより本館事務組織は総務係、整理係および閲覧係と蓮町分室、薬学部分館、工学部分館に改組した。なお、職員定数は20人、補佐員2名であった。

(4) 薬学専門図書係および工学部分館係を設置

昭和37(1962)年4月、理学部の五福地区移転に伴い文理学部分室を本館に併合して廃止した。この間、昭和29年と30(1955)年に行政整理が実施され2名の減員となったが、37年7月に補佐員の定員内繰入がなされて図書館職員定数は5名増加し、一挙に25名になった。

昭和39(1964)年6月、奥田地区の薬学部が五福地区に移転し、薬学部分館を廃止して薬学専門図書室が設置された。そして昭和42(1967)年4月、事務組織の改正により、薬学専門図書室および工学部分館の事務主任を廃止して薬学専門図書係および工学部分館係を設置した。

(5) 本館に受入係・参考係・学術情報係を設置

昭和42年度には教養部設置により、図書館職員定数は1名減となったが、10月に本館整理係の分掌事務のうち、図書受入関連業務を専務させるため受入係を新設した。これで本館は4係になり、分館および専門図書室を合わせ6係体制へと成長していった。

昭和49(1974)年10月、従来閲覧係で行っていた参考調査や文献複写の業務量増大に対処し、また新たなサービス業務を組織的に実践するため、参考業務を専門的に担当する係の必要性が生じ、薬学専門図書室を閲覧係の配下に置くとともに係長を廃して参考係を設けた。

昭和49年度に、経済学部経営学科が新設され、昭和52年度には文理学部改組により人文学部、理学部を設置、昭和54年度には経済学部経営法学科が新設されるなど、教育研究組織は着実に発展成長を遂げていった。それに比例して図書館の業務量も増大し続け、例えば年間受け入れ図書冊数は5年前に比べて約1万冊の増加になっていた。しかしその一方で職員定数は25名から21名に削減されて館全体が人員不足に陥り、円滑で迅速なサービスを提供していくことは極めて困難になっていた。こうした難局を切り抜けるためには業務の省力化・機械化が必須であるとして、昭和56(1981)年ころから館内に電算化ワーキング・グループを設け電算機の学習や研修等に取り組み始めた。

昭和54年(1979)4月、薬学部が富山医科薬科大学へ移行した。富山大学薬学部の廃止に伴って薬学専門図書室も同時に廃止になり、併せて当時の蔵書約5万冊は医科薬科大学へ移管された。

高岡市にあった工学部は五福地区に移転し、工学部分館も昭和59(1984)年から昭和60(1985)年10月までの2年間にわたって五福地区の工学部内に移転、分館を廃止して工学専門図書室に改めた。このことに関連して工学部分館係を廃止して本館閲覧係に所属させ、これを機に本館に学術情報係を新設した。

昭和58(1983)年9月、計算機センターの機種更新の概算要求に図書館の業務電算化計画を含めることになり、図書館の電算化ワーキング・グループが立案した「附属図書館電算化計画書」が概算要求資料として提出された。翌年9月から5万冊の図書目録データを作成するなど電算化準備に取りかかり、60年4月から閲覧業務、目録業務のコンピュータ処理を開始した。このような電算化へ向けた一連の事業推進の中から、学術情報係がワーキング・グループに代わり図書館業務のシステム構築の中心的役割を担うようになっていった。

(6) 図書館専門員の設置と事務部制への移行

平成元(1989)年4月には長年の懸案であり要望事項だった「図書館専門員」が設置され暫く参考係長の兼務が続いていたが、平成4(1992)年に専任の専門員が発令された。

大学図書館の近代化、情報化などに対応し、サービス向上を図る強力で有効な組織作りのため、平成6年度に図書館事務組織の部制化へ向けた検討に着手し、平成7（1995）年4月から情報管理課（図書館専門員および総務係、図書情報係、雑誌情報係）と情報サービス課（情報サービス係、参考調査係、学術情報係）の2課6係体制に改組した事務部制が発足し現在に至っている。

第2節 附属図書館商議会の設置

附属図書館商議会（以下商議会）とは現在多くの大学で用いられている「附属図書館運営委員会」のことである。

商議会は昭和24（1949）年8月から運営された。商議会は館長および各学部の代表で構成されていたが、幾度かの変遷を経て昭和39（1964）年4月に、分館を有する学部から分館長と学部図書委員会委員長の2名、分館のない学部からは学部図書委員会委員長と副委員長、そして図書館事務長を商議員とすることと定められた。当時、図書館事務長も館長候補者推薦に参画していたが、昭和56（1981）年からは教官の商議員に限られることとなった。審議内容は、附属図書館規定の改廃、図書館予算、学長から諮問のあったこと、館長または商議員からの提案事項、その他附属図書館に関する重要事項であった。

商議員数は12名前後であったが、経営短期大学部がオブザーバーとして出席し、薬学部と漢薬研究所が構成員だったころは、17名を数えた。薬学部および和漢薬研究所の富山医科薬科大学への移行、経営短期大学部の経済学部夜間主コース化、また教養部の廃止等で商議員数に減少があったが、事務部制の発足を機に事務長に代わって事務部長が入り、新たに課長が二人が商議員に加わって現在14名である。

（1）参考図書コレクションの収集整備

昭和43（1968）年、11代目の図書館長に就任した長谷純一氏から、辞・事典、書誌、データ集等の参考図書類を体系的に収集し、それらを学生・教官で共用する場を設けようというレファレンスルーム構想が商議会に提案された。

まず図書選定のため全教官を日本学術会議の分科会にならって専門別の10（後に11）にグループ化した。そして予算額から教官一人当たり単価を求め、それを各グループの人数に乗じて配分し、その予算枠内で専門主題に関連する参考図書を選択収集した。予算は、当時文部省から配分のあった「専門図書費」および学内予算からの配分額を充て、当初は総額50万円であった。

ところが、昭和48年度から「学生用図書費」が文部省で予算化し配分し始めたことに伴い、それまで参考図書整備の財源にしていた「専門図書費」は廃止され予算配分がなくなった。その後の予算確保の方途に関する商議会審議や事務折衝の結果、学生当積算校費、教官当積算校費のそれぞれ0.15%をこれに充てることで問題が解決し、その予算の名称は「基本参考図書購入費」とされた。その後累年の図書単価の上昇と文部省配分図書購入費の減額は一般教養図書、学習用図書の不足とコレクションの貧弱さを露呈するまでに至り、このため平成8年度商議会において、主に学生の利用に供すべき図書館資料の整備充実のために当経費増額の必要性が認められ、学内協議等を経て平成10年度から0.6%への増額が実現した。

（2）専門図書室の設置

昭和38（1963）年、薬学部の五福地区への移転に際して、五福地区における図書館体系の在り方を検討した結果、同一キャンパス内に分館の設置は認めないが、人文・社会科学系図書室、自然科学系（理工学系）図書室の設置を認めることを確認した。これに基づいて、薬学部薬学専門図書室を、工学部に工学専門図書室が設置された。

（3）雑誌製本費の予算化

学術研究の情報源、情報流通媒体として学術雑誌の果たす役割機能が高まり評価されるにつれ、雑誌の購入点数は年々累増していった。その一方で、製本予算の方はそれに見合った伸びを見ることがなく、未製本雑誌が書庫、研究室に貯まっていった。昭和53（1978）年、商議会ではその予算の拠出をめぐって論議が交わされた。製本予算は雑誌を利用する教官の研究費から出すべきとの意見が出され、こ

のことについて学部の意見も伺い検討した結果、前年度購入雑誌の数量から製本冊数を推算し、これの製本に要する費用を共通経費から確保するという結論を得た。以来毎年所要の製本予算が得られ、資料の散逸防止、雑誌資料の適切な組織化および効率的な利用に裨益している。

(4) 薬学専門図書室蔵書の移管

昭和54(1979)年、薬学部の富山医科薬科大学移行に伴い、薬学専門図書室の蔵書の移管について審議された。同図書室に所蔵する化学系の図書・雑誌、とりわけ有機化学系、生物学系の資料が富山大学から流出してしまうことは、関係する分野の学内研究者にとっては大きな痛手であり、理学部を中心に移管して本学に存置すべきではないか、などの意見があった。商議会としては、薬学部資産の移管を評議会が認めている関係上これはやむを得ないことである、移管の是非を巡って論議するより今後の利用のあり方について話し合うべきである、富山大学にとって必要不可欠な研究資料については回復措置の予算を文部省に要望すべきである、などの見解にまとめ、薬学部蔵書の医科薬科大学への移管が承認された。その一方で、両館長間での協議が行われた。そこでは、今後両大学の教職員、学生が資料を利用するに当たっては、相互に特段の便宜を図り、教育研究活動に不便支障の生じないように配慮し合うことが約された。

なお、移管後の欠落した資料の回復措置として、文部省から2年にわたり約800万円を得て、これによりバックナンバーによる補充を行っている。

(5) 図書館業務の電算化

著しい業務量増大とこれによってもたらされるサービスの質的な低下および遅滞等を回復するとともに、業務全般の抜本的な合理化、効率化とサービスの改善向上を図る有効な方策として、図書館業務の電算化に踏み出すことを決し、昭和56年、商議会に「電算化委員会」を設置して検討に着手した。後に職員で構成したワーキング・グループとも共同で調査研究を進めた。その結果、図書館電算化計画を計算機センターの機種更新に含めて昭和58年度概算要求へと歩を進め、昭和60(1985)年4月に富士通機

で計算機センターシステムのサブシステムという形で電算化が実現した。

やがて大学図書館界では、学内共用機によるシステムから図書館専用機によるシステムへの移行が一般的になり、昭和63(1988)年に情報処理センターと同一メーカー機を想定して図書館専用機による機種更新の概算要求を行った。ところが平成元(1989)年3月、センター機はIBM機にリプレースされ、センター機のもとにある図書館にもIBM機が導入された。これは図書館が想定していたものではなかった。その後、平成元年度予算で図書館専用機の導入が認められ、機種選定を行ったところIBMには当時の当館規模に適する機種がなかったため、富士通機を選定せざるを得ない結果になった。しかしこのことは新システムの運用上、計画段階では予想しなかった重大な問題を引き起こすことになる。その問題とは、情報処理センターの機種と相違する機種の導入のため、これまで研究室から直接アクセスして行っていた目録情報の検索がそのようにはいなくなるということである。これは、電算化の眼目の一つであるサービス向上に全く逆行する事態であった。

こうしたインターフェース上の問題を巡って商議会では様々な意見が出されたが、情報処理センター機との通信の適正化を図るには多額の費用を必要とするため、選定機種での新システム構築を進めざるを得ないことが確認された。この問題は平成6年度に学内LANが完成し、異機種間の通信が可能となることで解決を見た。

(6) 自己点検評価活動

平成4(1992)年、大学の自己点検評価活動に合わせ、商議会にも各学部商議員1名から構成される自己点検評価委員会を設置し、その下に管理運営、利用者サービス、資料整備等、情報システムの4つの専門委員会を置いた。この専門委員会には図書館職員も加わり、商議員が各専門委員会の委員長となって図書館業務の点検評価活動に当たった。翌年3月には各専門委員会は商議会に報告書を提出し、それを「平成4年度図書館白書」にまとめて平成5(1993)年5月に発表した。平成6年度にも前回の自己点検評価の成果を踏まえた自己点検評価を実施

し、その結果を「平成6年度図書館白書」として平成7（1995）年7月に公表した。いずれも図書館の狭隘化した実状とそれに起因する諸問題を明らかにするとともに、その打開策としての図書館増築の必要性を訴え、広く学内の理解を得ることに努めた。

（7）増築計画と増改築

平成6（1994）年に図書館増築の概算要求をするに当たり、「附属図書館増築検討委員会」を設け、新しい図書館機能を盛り込んだ増築案を作成した。平成8年度第二次補正予算で増築が採択され、平成9（1997）年2月に約5,400平方メートルの増築と既設建物の改修工事が完了した。この結果、総面積

で約2倍、利用者サービス域で見ると約4倍の広がりになった。

商議会は図書館の管理運営の適正化、サービス向上の諸方策を検討し意思決定する重要な委員会である。かつては学部所在地が分散していたため、館長選挙のある年を除いて年2回程度の開催であったが、教育研究活動の進展に即して図書館活動も発展を遂げ、それに伴い予算や図書館資料の収集、サービスの在り方など重要な問題について審議する機会が増え、年に数回開催されるようになった。図書館サービスの多様化と量的増大の中で、図書館機能の質的向上と個性化が求められている今日、商議会の果たす役割はますます重要になっている。

第4章 図書館業務

第1節 閲覧サービス

昭和33年（1958）11月に制定された附属図書館閲覧規則では、開館時間を平日は午前8時30分から午後4時30分、土曜日は午前8時30分から正午までと定め、職員の勤務時間帯に限っていた。昭和34年に夜間授業の経営短期大学部が併設されたことと、時間外閲覧を切望する学生の声に応えるため、昭和35（1960）年9月以降は時間外閲覧内規を準用して、平日の開館時間を午後8時まで延長した。さらに昭和38年度からは土曜日を午後3時30分まで延長しサービスの拡大を図った。

昭和45（1970）年7月に閲覧規則の一部を改正するとともに本館時間外閲覧に関する内規を廃止し、休業期間を除き本館は8時30分から午後8時まで、工学部分館と薬学専門図書室は午後5時までの開館時間とした。土曜日については学部の強い要望もあって、全館が8時30分から午後3時30分までとしていたが、本館は昭和54（1979）年4月に閲覧規則一部改正を行い、午後4時30分までの1時間延長を実施してサービス改善に努めた。

昭和63（1988）年2月に、図書館利用の多様化やサービス形態の変化に対応して「富山大学附属図書館閲覧規則」を廃し、これを「富山大学附属図書館利用規則」に改めた。また、大学院生の専門的知識を学生へのサービスに活かすことを企図し、平成元年度から時間外勤務要員の一部に院生を採用した。加えて平成2年度から、担当要員をさらに1名増員し、職員1名を含め3人による時間外サービス態勢を整えた。しかしながら、国家公務員の完全週休2日制の実施に伴い、平成4（1992）年5月1日から本館および工学専門図書室ともに土曜閉庁を実施している。

平成4年度第7回商議会で、図書館の土曜閉庁の利用者サービスにもたらす問題点と土曜日開館再開

のために必要な諸条件、特に経費の確保を巡って審議した結果、平成5年度から再開するとの結論を得た。これを受け、本館および工学専門図書室ともに、休業期間を除き午後0時30分から午後4時15分に至る土曜日開館が再開される運びとなった。このサービスに、本館は職員1名とパート職員2名、工学専門図書室はパート職員1名が就き、本館担当職員は本館の管理と同時に工学専門図書室の管理にも当たった。また併せて平日の開館時間も延長され、平成5（1993）年4月、本館は午後8時30分まで、また工学専門図書室は午後7時まで延長するとともに、このサービス拡充に対応して担当要員2名を増員した。それまで本館では土曜日の時間外サービスにおいては開架図書の提供に限っていたが、平成6年度から書庫に収蔵する図書も利用に供することにし、また工学専門図書室では平日開館時間をさらに1時間延長して午後8時までとした。

サービスの改善拡充策はさらに続き、平成7年度第8回商議会において、土曜日・日曜日の開館を午後0時30分から午後4時30分までと定める利用規則改正を決議し、これを受けて平成8年度から外部委託による土曜日・日曜日のサービスを開始した。そして本館増改築後のサービス強化と4倍近くに増えたサービス用フロアの適正な管理と利用環境維持のため、平日の時間外開館担当者を4名に増員した。

第2節 参考業務サービス

参考業務は、資料や情報の提供を通して利用者の教育・研究活動を支援するサービスの一つで、閲覧・貸出と並んで重要な利用者サービスの一部門である。

その主な内容には、ILL業務、利用指導、参考調査があり、名称から連想されるところでは、利用者からの質問に対して調査を行い、回答の含まれる

資料を提供する参考調査がその中心に位置しそうであるが、本学図書館では I L L 業務が量的に最も多く、参考業務全体の大半を占めている。

ところで I L L とは、Inter-Library Loan の略語で、一般に「図書館間相互貸借」と訳され、自館にない資料について、他の図書館からコピーまたは原本を取り寄せ、申込者の利用に供することをいう。サービス内容は、コピーで取り寄せる文献複写と原本を送ってもらう現物貸借とに大別されるが、その主流は前者である。

過去10年間における文献複写と現物貸借の推移を下表に示す(表1、2)。

I L L 取り扱い量が上図のように飛躍的増加を示した契機には、学術情報センター(NACISIS)による NACISIS - I L L システムの提供があり、本学は平成4(1992)年4月からこのシステムを利用している。

このシステムでは、求める資料の所在が容易に調べられる。以前は各図書館が個別に編集発行する蔵書目録や全国的な規模で編集された『新収洋書総合目録』等の総合目録を手掛りに、求める資料の所蔵館を探して利用を依頼するため、申込み受付から資料の引き渡しまでかなりの日数を要していた。

当システムへの参加館はネットワーク化され、かつ膨大な量の書誌・所蔵データを共有する shared

catalog を利用することにより、相互利用の事務が非常に簡素化され、利用者の申し込みから文献の到着までの所要時間が大幅に短縮された。

このように、I L L 業務は利用者の教育・研究活動支援サービスとして大いに貢献しているのであるが、また一方では、定員削減等の影響で年々増加する申込み量に見合う担当要員確保が難しいこと、図書目録業務電算化以前のカード式目録データをいかにして入力するかという遡及入力の問題、研究室にいわゆる長期貸出になっている資料の共同利用による有効活用化等の諸課題がある。

第3節 附属図書館専用電算機

(1) 貸出、返却、目録等の電算処理開始

昭和59(1984)年6月、情報処理センターに富士通 F A C O M - M 360 の導入が決定された。これとともない図書館業務用ソフトである富士通図書館パッケージ「I L I S」が選定され、情報処理センター F A C O M - M 360 コンピュータを主機とする学内光データハイウェイで結ばれたパーソナルコンピュータ F 9450 - が配置された。一方、図書館蔵書のうち本館開架図書4万5千冊、工学専門図書室の学生用図書約5千冊に図書 I D ラベルを貼り、また情報処理センター F A C O M - M 360 内に書誌・所蔵データベース、利用者データベースを作成するなどして、貸出・返却業務の電算化準備を進めた。そして昭和60(1985)年4月より OCR ハンドスキャナーを使用して利用者 I D カードと図書 I D ラベルを読み取り F A C O M - M 360 内の書誌・所蔵・利用者データベースとの照合による貸出処理を開始した。目録検索システムも、先に作成された書誌・所蔵データベースをもとにサービスを開始した。

また昭和60年4月以降の新規購入図書には図書 I D ラベルを貼り、目録データ作成の都度書誌・所蔵データベースを追加形成していった。まだ図書 I D ラベルを貼付していない書庫内の図書は、貸出し時に図書 I D ラベルを貼り、書誌は遡及入力としてデータベースへ追加した。このように昭和60年4月から6月の間に閲覧システム、目録検索システム、図書目録作成システムが順次稼働して、図書館電算

表1 文献複写業務

区分	学内		学外			
	件数	枚数	受託		依頼	
			件数	枚数	件数	枚数
平成元	3,475	19,812	1,791	14,819	2,044	24,795
年度2	3,213	19,102	2,022	20,209	1,629	14,398
3	3,637	21,064	2,150	19,781	1,847	20,329
4	3,143	23,550	3,062	28,269	2,019	25,242
5	2,815	19,673	2,988	27,270	2,461	21,954
6	3,090	19,942	3,622	33,163	3,104	28,664
7	1,346	12,617	4,610	40,160	3,650	34,746
8	2,810	28,524	3,699	30,778	3,446	28,313
9	2,719	30,428	1,880	14,676	3,936	34,619
10	2,707	30,732	3,373	26,616	4,131	30,663

*平成9年度・受託件数の減少は増・改築による業務休止のため。

表2 現物貸借

区分	平成元年度	2年度	3年度	4年度	5年度	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度
貸出	70	102	224	300	329	287	317	415	396	682
借用	35	39	41	39	97	82	94	113	192	249

化は大きく前進した。

その後、昭和61(1986)年3月には東京大学文献情報センター(現在は学術情報センター)とN1ネットワークで接続し、全国総合目録データベースの書誌データ等を本学目録データベース作成時に利用し始めた。同年4月には雑誌目録初期データ約1万種セットアップ、同年10月雑誌目録作成システム稼働、昭和62(1987)年4月雑誌受入システム稼働、昭和63(1988)年4月図書受入システム稼働などと、電算化は着々と進展していった。

(2) 新図書館情報システム

平成元(1989)年3月、情報処理センターシステム機のIBM-3081KX4への機種更新にともない、図書館にIBMの新しい図書館業務パッケージ「DOBIS/E」が導入され、検索時におけるレスポンスの一層の改善が実現した。その11カ月後、目録作成システムの改良に向けて検討を重ねる過程で、平成元年度予算で図書館専用電算機が導入されることが決まり、情報処理センター機の共用による電算化時代からホストコンピュータの図書館内設置による新図書館情報システム運用へと移行していった。

平成2(1990)年2月図書館専用機に富士通FACOM-K290Rを導入し全業務システムを富士通図書館パッケージ「K/ILIS」へ移行した。学術情報センターとはVTSS方式で接続することで応答速度の短縮と安定が図られた。FX/RDBを採用し重複キー等が省かれたため、データベースの容量は情報処理センターとの共用時に比べ3分の1に軽減された。またホストと端末との間で、学術情報センター利用システム、雑誌受入システム、閲覧システム等に対する処理の分担や負荷の分散を図り、図書館専用機の導入により、いくつかの懸案事項が解決された。しかしプロトコルの違いから、トークンリングLANで情報処理センターと結ばれている通信網とは接続困難な状況にあった。このことからトークンリング型だけでなくイーサネット型LANをもカバーする学内LANの構築、またTCP/IPを標準プロトコルとするUNIX機への切り換えが検討されることになった。

(3) 機種・システム更新

平成6(1994)年2月、図書館専用電算機はUNIXワーク・ステーションシステムへ更新された。業務システムは富士通UNIX版図書館情報システムILIS X/WRへ移行され、受入用の図書館業務パッケージK/ILISとの連携部分等を機能追加して運用を開始した。メイン・サーバはFACOMS 4/10、UNIX版標準GUI「日本語OPEN WINDOWS」を使用して、マルチタスク/マルチウィンドウにより複数業務の同時処理ができるようになり、また情報検索システムも「FAIRS/SV」をデータベースシステムに採用し、機能は大幅に向上した。学内においては同年3月、光ファイバー幹線を中心とするキャンパス情報ネットワーク(FDDI回線)が整備され、学術情報センターの提供するSINETに接続し国内外の各種ネットワークとの高速通信が実現した。学内においても、情報処理センター機とのファイル転送、工学専門図書室との通信、学内研究室からの蔵書データベース検索が可能になった。

平成10(1998)年2月さらに機種更新がなされ、メイン・サーバは富士通S 7/300Uモデル170Eへ変更、前回受入システムで使用していたK/ILISをすべて撤去し、業務システムは富士通UNIX版図書館情報システムILIS X/WRで一元化した。この結果サーバのメモリ、ハードの容量は一層大きくなって快適なレスポンスが得られ、作業能率は一段と向上した。

第4節 情報検索サービス

(1) 学術情報センターとの接続

昭和61(1986)年3月、東京大学文献情報センターと情報処理センターFACOM M360とがN1ネットワークで接続された。これによりNACSSISCAT(目録所在情報サービス)の利用を開始するとともに、昭和62(1987)年4月から始まったNACSSISIR(情報検索サービス)の利用環境が整ったのである。

(2) オンライン情報検索サービス

昭和62年10月、図書館の端末からオンラインで検索するNACSIS-IRの利用が研究者をサービス対象として始まった。当時NACSIS-IRで検索できるデータベースは13種類であったが、その後新しいデータベースが数多く追加され、データ量も充実していった。平成2(1990)年のシステム更新に伴いモデムによる接続へ切り換え、平成4(1992)年に、国立歴史民俗博物館データベース、WINET(国立婦人教育会館)、富山県生涯学習情報ネットワーク、国文学研究資料館データベース、NIERCER(国立教育研究所)、UTOPIA(筑波大学)、STN International(Scientific & Technical Information Network)、JOIS(JICST)、DIALOG(DIALOG Information service [当時])が、平成5(1993)年には国立民族学博物館データベースが加わった。同年11月、学術情報センターは日本科学技術情報センターとゲートウェイによるデータベースの相互利用を開始、図書館もこの方法でJOIS、STNへ接続した。非商用外部データベース利用の継続については、利用実績やアクセス環境等を考慮して年度ごとに見直しを続けている。

平成6(1994)年3月、キャンパス情報ネットワーク(FDDI回線)が完備されて学術情報センター提供のSINETに接続、国内外の情報がインターネットにより早く簡単に入手できるようになると、インターネットを介する多種データベースへのアクセスが可能になった。平成8(1996)年3月の学内ATMネットワークの導入を機に、図書館ではWWWによる館内情報探索端末利用サービスを企画し、同年4月からアクセスフリーなインターネット情報資源を利用する情報検索(利用者主導型)サービスを始めた。このため、ユーザーの求めに応じて図書館員が代行する情報検索サービスは、平成9年度あたりからNACSIS-IR、STN、JOISに利用頻度が偏るとともに利用件数の減少化が顕著になった。さらにネットワークの普及、STN、JOISのWWW版登場により初心者にも検索が容易になったことなどから、ユーザーがIDとパスワードを取得して、直接検索できる環境が整い、図書館員が代行検索をする時代は終わろうとしている。

(3) CD-ROM情報検索サービス

平成4年2月からCD-ROM情報検索用パソコンを設置し、国内10種(CD-HIASK、J-BISC、学術雑誌総合目録CD-ROM版、CD-人情報、CD-BOOK、CD-WORD、電子広辞苑、法律判例文献情報、NHKできごと、AURORA on CD-ROM)、海外5種(Social Science Index、DIALOG on Disc Eric、Books in Print Plus、Ulrich's Plus、Oxford English Dictionary on CD-ROM)のサービスを開始した。その後、国内ソフト数種(日本経済新聞、多機能世界地図システム、世界大百科事典、岩波電子日本総合年表、CD-MAGAZINE、CD-新現代執筆者大事典、世界美術辞典、雑誌記事索引、富山大学蔵書目録)を追加した。

平成7年度、ネットワーク対応CD-ROMサーバが導入され、CD-ROMサーバDEC prioris XL server 5100にCD NetROM/Q-EISA-14/14のドライブタワー2台を接続、24時間の検索サービスを開始した。CDサーバソフトはWindowsNTを使用し、TCP/IP、Apple Talk 2つのプロトコルに対応しているため、研究室からWindowsとMacintoshのいずれからでもCD-ROMネットワーク対応ソフトを検索できる環境が整い、平成8年5月から運用を開始した。用意したデータベースソフトはBooks in Print、Ulrich's Plus、ERIC、Gale Directory of Databases、科学技術文献速報：環境公害編の5種類であった。スタンドアロンソフトでは新たにShakespeare on Disk、Sherlock Holmes on Diskの2種類が加わった。平成9年度、さらにネットワーク対応ソフトの内容を見直し、雑誌記事索引、科学技術文献速報：ライフサイエンス編、科学技術文献速報：物理応用物理編、Social Sciences Indexの4種類になった。平成10年度にはこれらにCD-ASAX 50 yrs.: 戦後50年朝日新聞見出しデータベースが加わり、徐々に利用者も増加していった。またスタンドアロンの方もこの時期に見直し、J-BISC、世界美術辞典、CD-HIASK、NHKできごと、CD-WORD、電子広辞苑、世界大百科事典、岩波電子日本総合年表、Oxford English Dictionary on CD-ROMの9種類に変更した。

(4) OPAC

OPACはOnline Public Access Catalogの略語でオーパックと読み、パソコン等のコンピュータ端末機を利用して図書、雑誌の書誌・所蔵情報を検索するシステムのことである。

昭和60(1985)年4月、図書館システム電算化にともない、図書IDラベルが貼られ書誌・所蔵データベースの作成された図書を対象にOPAC目録検索システムが稼働し、この時点をもってカード目録の編成を凍結した。以後、OPACはカード目録に代わる新しい強力な検索手段として利用者を迎えられるとともに、書誌・所蔵データベース件数も順調に増えてゆきOPACシステムは着実に充実していった。平成元年、図書館にIBMの「DOBIS/E」が導入された時点では、学内トークンリングLANによる研究室からのOPAC検索が可能であったが、平成2年の新図書館システムになって図書館専用電算機富士通FACOM-K290Rが導入されると、プロトコルの違いからそれができなくなり、目録検索のために図書館へ足を運ばねばならないサービス形態へと後退を余儀なくされた。が、平成6年、図書館専用電算機がUNIXワーク・ステーションへ移行し、学内LANの利用環境整備によって、同年7月Telnetを利用したOPAC検索サービスを正式に開始し広く学内外に公開した。さらにインターネットの普及により、WWW版OPACを平成9(1997)年5月から公開した。平成10(1998)年4月時点で図書約35万冊、雑誌約1万5千種のデータベースが形成されている。

第5節 ビデオ・ライブラリー・システムの開始

平成4年度第6回商議会において、視聴覚資料の有効活用による情報提供サービスの拡充を図るため、ビデオ・ライブラリー・システムを導入することが議せられ、教育研究特別経費に申請して採択された。

これを受けて、個人用ビデオデッキ1台と4座席からなる大型映像用ブース1台を本館自由閲覧室に設置し、工学専門図書室には個人用ビデオデッキ2

台を備えた。

ソフトウェアでは、本館に22タイトル149巻、工学専門図書室に5タイトル36巻を備え付けて利用に供した。平成9年度末現在、約400巻の整備を図り、外国人留学生も含め幅広い利活用がなされている。

第6節 図書館WWWサービスの公開

平成7年度の第1回情報処理センター運営委員会(平成7年4月11日)における「富山大学におけるWWWサービスについて」の審議結果を受け、平成7年度第1回附属図書館商議会で、附属図書館でもWWWサービスを開設することが確認された。

情報処理センター内サーバー機の一部借用のかたちで図書館WWWサービス(<http://www.toyama-u.ac.jp/tya/library/>)を本学キャンパス情報ネットワークに公開したのは平成7(1995)年5月25日であった。図書館利用案内、特殊コレクション案内、そして利用マニュアル類が開始時の内容であった。書誌サービスの試行として「吉本隆明著作刊行リスト」(<http://www.toyama-u.ac.jp/tya/library/ytbib.html>)が掲載されたのは2カ月後の平成7年7月からで、その後のアップデート作業を継続するとともに遡及データも加え、現在まで約7年分のデータを参照できるようになっている。また、WWWサービスは図書館のネットワーク検索サービスの要になっているOPACやCD-ROMへのアクセスと検索の方法など、図書館情報資源サービスの利用法を手軽に案内教示する手段としても不可欠でかつ有用なツールとしての位置を占めている。

外部ネットワーク情報資源の有効利用を目的とした、インターネット上の図書館関連リソース案内ページの整備拡充のため、図書館WWWサービスのトップページをリニューアルしたのが平成7年12月2日である。以来アップデートを維持している「外部ネットワーク情報資源案内」メニュー配下の資料媒体/主題別リンク集の各ページを併用する形で、ブラウザのフレーム機能を使い「インターネットで情報探索」(<http://www.toyama-u.ac.jp/tya/library/inetres.html>)画面として再構成し、館内専用端末を用いたWWWによる情報探索端末利用サービスを平成8

(1996)年4月19日から開始し、現在に至っている。現行の探索メニューは「図書館情報探索マップ」、「図書を調べる」、「雑誌・文献を調べる」、「学会や特許を調べる」、「分野別探索で調べる」、「索引で調べる」、「キーワードで調べる」、「就職情報を調べる」、そして「情報探索マニュアル」の9項目である。

平成8年度に入り、インターネットでいろいろな図書館の所蔵目録を検索しようとする利用者向けの目録情報サイト案内ページ「OPAC Table (内外のOPACを一覧する)」(<http://www.toyama-u.ac.jp/tya/library/opg.html>)や代表的サーチエンジンの特色とそれぞれの使い方をとりまとめたページ「Search Table (世界のWWW情報探索)」(<http://www.toyama-u.ac.jp/tya/library/searchtable.html>)そして「インターネット情報探索への道：最初の一步」(<http://www.toyama-u.ac.jp/tya/library/w3tip1.html>)といったインターネット検索初心者向けのガイドページを作成し公開してきた。

平成9(1997)年5月に新装オープンした本館各階閲覧フロアにDHCP接続サービスコーナーを設け、IP接続可能な携帯端末を持参する図書館利用者向けにWWWを始めとするインターネットの利用環境を整備し、また平成6(1994)年7月のtelnet

版OPACの公開以来要望のあったWWW版OPACを総合情報処理センターの支援を得て「富山大学図書館情報検索システム：図書・雑誌検索」として同年5月からサービスを開始した。

OPACやCD-ROM以外の附属図書館情報資源サービスとして、平成9年度に「川合文書データベース」とヘルン文庫所蔵「ちりめん本」を電子化した「ちりめんページ」が、そして平成10年度にはヘルン文庫所蔵「神国日本」の原稿を電子化した「神国日本画像データ」がいずれも総合情報処理センター坂本助手の尽力により公開の運びとなった。書誌サービスの第2弾として「ラフカディオ・ハーン関係文献目録」(<http://www.toyama-u.ac.jp/tya/library/lhrcat.html>)を平成9年12月18日に公開している。

新入生向けに図書館で初めてインターネットを使う際のガイドマップである「WWW図書館情報探索TABLE」(<http://www.toyama-u.ac.jp/tya/library/wirtable.html>)を平成10(1998)年3月に公開した。

その後、平成10年7月23日に電子ジャーナルのWWWによる閲覧サービスを開始するとともにアクセス時の操作性を良くするため、2回目となるトップページのリニューアルを行った。

第5章 図書館資料

第1節 蔵書

図書館は、大学の母体となった富山高等学校、富山師範学校、富山青年師範学校、富山薬学専門学校、高岡工業専門学校の蔵書を包括して設置された。本学発足時における蔵書冊数は、和漢書、洋書を含めて約11万冊であった。また、昭和30年代における年間平均受入冊数は約7,000冊台であった。昭和61(1986)年10月に工学部分館の移転統合が完了し、本学の全蔵書(約60万冊)の効率的活用の体制が整

表1 分野別蔵書冊数 (平成11年3月末現在)

区分	和書		洋書		合計(冊)
	本館	工学専門図書室	本館	工学専門図書室	
0 総記	43,916	4,288	15,421	578	64,203
1 哲学・宗教	34,216	1,470	14,938	41	50,665
2 歴史・地理	52,925	2,455	11,895	44	67,319
3 社会科学	192,757	2,177	69,256	71	264,261
4 自然科学	59,875	16,306	76,268	12,063	164,512
5 工学	22,433	35,435	5,586	18,283	81,737
6 産業	28,777	717	6,332	197	36,023
7 芸術・体育	22,089	858	3,585	72	26,604
8 語学	25,000	1,086	16,765	141	42,992
9 文学	60,617	1,783	32,998	2	95,400
合計	542,605	66,575	253,044	31,492	893,716

表2 学術雑誌分野別種類数 (平成11年3月末現在)

区分	和雑誌(種)	洋雑誌(種)	合計(種)
0 総記	2,048	156	2,204
1 哲学・宗教	177	211	388
2 歴史・地理	476	199	675
3 社会科学	3,558	1,303	4,861
4 自然科学	1,335	2,065	3,400
5 工学	1,435	790	2,225
6 産業	800	123	923
7 芸術・体育	222	91	313
8 語学	223	239	462
9 文学	375	149	524
合計	10,649	5,326	15,975

った。その後、年間受入冊数もしだいに増加し、昭和50年代からは、2万冊台となり、平成10年度末の蔵書冊数は、全部で約87万冊台に達している。なお、雑誌は、約16,000種である。(蔵書の推移は、資料編を参照。)

第2節 大型コレクション

文部省の予算措置で収集した高額図書資料

1. 承政院日記(韓国) (昭和54年度採択)

李王朝時代の宮廷記録で、現存分の仁祖元年(1623)から隆四年(1910)に至る影印本で、政治、経済、文化、外交、軍事の基本資料。

2. ヘリツェン女性史資料コレクション(アメリカ) (昭和63年度採択)

The Gerritsen Collection Women's History, 1543 - 1945. マイクロフォーム版
Unit 2: Periodicals (逐次刊行物シリーズ)
オランダにおける女性問題研究の先駆者である Dr. Aletta Jacobs Gerritsen が夫の Carl V. Gerri tsen と共に、長年収集した女性史研究資料をもとに西欧各国の文献を収集したもの。

Unit 2 は、1860~1900年間という欧米において著しい女性の地位の変化が見られた時期を中心に主要な雑誌およびその他の定期刊行物265点を収めている。

3. ドイツ学位論文集成:民法、民事訴訟法、財政法・税法(ドイツ) (平成3年度採択)

Collection Dissertations on Civil Law, Civil Procedure, Financial and Tax Law.
ドイツにおいて1900年以降に公刊された民法、民事訴訟法、財政法、税法の重要な学位論文集成で、1,800余りの文献からなる。

4. ランドルト - ベルンシュタイン数値集(ドイツ)
(平成6年度採択)

Landolt-Bornstein: Numerical data and functional relationships in science and technology.

New series. Group. 3 & 4.

物理学、化学、天文・地球科学、工学分野の数値を広範囲に収録したもので、6グループで構成されている。

このうち、グループ3(結晶物理と固体物理)および4(物質の巨視的工学的性質)のなかで本学未所蔵の65冊を購入し備え付けた。

5. 化学抄録誌累積索引(アメリカ)
(平成9年度採択)

Chemical Abstracts. Collective Index. 11th

同 12th.

国際的評価の高い、化学全般にわたる抄録誌である「Chemical Abstracts」の5年間の累積索引である。この抄録誌は、世界で発表された化学とその技術情報の包括的な抄録誌で、雑誌記事、特許、会議録、学位論文、書籍、総説、技術レポート等の文献のみならず化学構造式、性質等をも網羅的に収録している。

なお、11thは1982~1986年、また12thは1987~1991年の間に収録された抄録に対する累積索引になっている。

第3節 視聴覚資料

本学の視聴覚資料の種類別構成は、表のとおりである。

近年、本学ではこれまでのマイクロ資料に替わってCD-ROM、ビデオテープ等の受け入れが増加している。資料の種類や形態の変化に対応して、機器の整備充実が必要である。

表3 視聴覚資料 (平成11年3月末現在)

種類別	所属別 附属図書館	内 訳	
		本 館	工学専門図書室
マイクロフィルム	1,964	1,964	0
マイクロフィッシュ	15,446	15,446	0
カセットテープ	1,146	1,086	60
ビデオテープ	519	519	0
C D - L D	83	83	0
レ コ ー ド	2,499	2,499	0
映 画	163	163	0
ス ラ イ ド	462	462	0
C D - R O M	229	225	4
そ の 他	86	56	30
計	22,597	22,503	94

第4節 留学生資料

留学生に彼らの母国に関する最新情報を伝えたり、日本語に習熟し、日本の歴史文化や生活習慣の理解を通して、日常および勉学生生活を不便なく送ることができるようにしたりするため、必要な情報をタイムリーに提供することが求められている。平成3年度から留学生経費の中から予算を得、主として、日本語学関係の学習図書やビデオ教材等を揃えてその内容の充実に努めてきたところであるが、質的量的にその不足不十分さは否めない。また今後、海外衛星放送受信システムの導入により、主に、留学生の多いアジア諸国の日々の情報がいち早く得られる環境作りにも努めていく予定である。

また増改築の中で留学生コーナーを設置し、自主的な留学生交流が活発に行われるようその場を提供している。

第5節 貴重資料

(1) ヘルン文庫

ラフカディオ・ハーン(帰化名:小泉八雲1850~1904)の愛蔵書2,435冊からなるコレクションで、旧制富山高等学校初代校長南日恒太郎氏の尽力の結果、昭和2(1927)年、馬場家から開校記念として寄付された。文庫の大部分は来日後に収集されたものであるが、中にはシンシナティ、ニューオリンズ

時代に買い求めたものもある。また渡日に際して友人の眼科医グールドに預けた蔵書は、ハーン没後小泉家に返還され文庫に収められている。日本で集めた図書には英文学関係書が多く見られるが、これはハーンが東京帝国大学で英文科講師の職にあったことによるものだろう。

文庫は当初、旧制富山高等学校校舎の書庫の一部に貴重書として保管されていたが、昭和10（1935）年に独立した建物が竣工し小泉八雲図書館として多くの利用者を迎えた。設計図によると建物中央に書庫を配しその周囲が閲覧スペースという様式をとっている。昭和20（1945）年から21（1946）年にかけて、空襲を避けるため黒部に疎開している。昭和24（1949）年富山大学設置に伴い文理学部に置かれた図書館本館が旧制富山高等学校に代わって引き継いだ。昭和32（1957）年に図書館は五福地区に建てられた経済学部との共用建物に移転したが、文庫は学部の五福地区集中化にともなって文理学部が移転する昭和37（1962）年まで蓮町にあった。昭和37年の移転を機に文庫は五福の本館に移転し、蓮町にあった独立建物としての文庫は昭和38（1963）年に取り壊され、平成10（1998）年その跡地に記念碑が建てられたのである。昭和47（1972）年に竣工した現在地の図書館正面2階にヘルン文庫の施設設備が用意されそこへ移転し、平成9（1997）年の増改築後は新館5階に作られたヘルン文庫・ヘルン閲覧室へ移り現在に至っている。

ハーン生誕100年に当たる昭和25（1950）年、ハーンゆかりの地、松江市からヘルン文庫譲渡の依頼があったが、この申し出を断っている。その後平成2（1990）年、島根大学は大型コレクション集書計画としてヘルン文庫のマイクロ化による収集計画を立て、主として洋書の複写許可を求めてきている。このマイクロ化事業は平成3（1991）年まで2年にわたって実施された。

なお、和漢書については国文学研究資料館がマイクロ化して所蔵している。

ヘルン文庫には「神国日本」の直筆原稿が含まれている。その原稿用紙が酸性紙であるため、明らかに紙の劣化が進行している。また、経年によるインクの褪色も進むなど、貴重な唯一物を良好な状態で長期保存することが危惧されるところとなった。こ

の原稿にはヘルンの手によるとされる色鉛筆書きのページ付けや書き込みがあり、文章推敲の跡を辿る上で極めて有益な情報が盛り込まれているとされながらも、これ以上の劣化と損傷を防止するため、公開にはある程度の規制措置を取らざるをえなかった。このような完全防止の不可能な紙の劣化への対応策として、また将来、複製品の作成をも視野に入れ、平成9年度教育改善推進経費を得てデジタル複製を行うとともに、公開・閲覧の制限を補い広く利用に供するためこの複製電子情報をもとに画像データベースを作成した。

一方、文庫では創設以来、ハーンの著書、翻訳書、およびハーンに関連する様々な研究書、雑誌論文、新聞記事の切り抜きなどの収集整理を継続してきた。昭和34（1959）年に平岡伴一館長がこれら資料を対象に「富山大学ヘルン文庫所蔵ヘルン関係文献解説付目録」を編集刊行された。その後40年間に集められた資料数が3倍に達したため、平成9年度教育改善推進経費を受けて「改訂版」を刊行した。この改訂版は、ハーンの著書・全集に内容細目を付けて作品単位で検索できること、ハーン研究の著書や雑誌論文からも検索できる「書名・文献索引」を新たに設けたこと、ハーン作品の一覧、ハーン研究者別の文献も検索できるよう「著者・執筆索引」を設けたこと、「問題別事項索引」を加えたことにより、単なる収録件数の増改訂に留まらずユニークな目録に仕上がっている。なお、この目録はホームページでも公開している。

ところで、ハーンにちなんで製作された絵画がある。平成2年、教育学部丹羽洋介教授によって描かれたフレスコ画「輪廻 ラフカディオ・ヘルンに捧ぐ」がそれである。この作品は文庫が増築後の新館5階へ移転するまでは、旧館2階にあった文庫の前に掛けられ文庫と一体をなしていたのであるが、文庫のみが移設したため分離してしまい、それぞれが全く別個のものであるかの観を呈している。ヘルン文庫を訪れる人々に製作の心を広く伝え、末永く文庫とともに語り継がれるよう、壁画も新館5階へ移設されることが望まれる。

（2）川合文書

藩政時代砺波郡全体を才許した十村（加賀藩にお

回 想 録

平 田 純

敗戦の翌年、昭和21（1946）年の春に旧制富山高
等学校文科甲類の生徒になった私にとって、蓮町の
校舎の南側、グラウンドに面して、小さな緑の陰に建
っている、こぢんまりした白壁のヘルン文庫は、近
づけないだけに、魅惑的な存在だった。よくマント
姿の仲間同士連れだって、秋の日溜まりのなかを、
ヘルン文庫の建物の段に腰を下ろして、遙かなる山
並みに目をやりながら、ダベリングに余念のなかっ
たことを思い出す。

建物の中に入ったのは二年生の時だったか。事務
室を通り抜けて、別棟のヘルン文庫の重々しいドア
を入ると、中にまた白壁に囲まれた部屋があり、ぐ
るりが回廊になっていた。ガラス越しに整然と並ん
だ書物が厳かに見えた。私は図書室に収まりきれな
くて回廊に並べてある本の一冊を借り出しただけだ
った。

昭和31（1956）年に大学に勤め始めて、また図書
室に近づくことになったが、ヘルン文庫との関わり
はまるで無かった。文学者としてのヘルンへのアプ
ローチが未だ掴めていなかったから。そして、ヘル
ンとの縁が深まらない内に、全学部が五福地区に集
結することになり、移転に心を奪われている間に、
気が付いたときにはヘルン文庫の瀟洒な白い平屋建
ての建物は無くなっていった。

平岡伴一教授が館長となられて、地道に収集を続
けておられた資料を纏めて、関連図書目録を編纂刊
行されたが、それ以外、ヘルン関係のことは特に何
事もなく打ち過ぎていたようだ。しかし、内外にヘル
ン文庫の名は聞こえていたらしく、マンスフィー

ルド駐日アメリカ大使は夫人同伴で見学に見えてい
る。アイルランド大使ローナンさんが見えて、学生
にアイルランド文学の講義をしていただいたのも、
ヘルン文庫のお陰であった。東大図書館所蔵のギリ
シャから贈られたヘルンのリリーフ像をコピーさせ
てもらったのは、当時の柳田学長と川上事務局長の
配慮に負うところが大きかった。

そのうちに、明治開化期の日本の姿の最も正確な
記録としてヘルンの作品の評価が、民族学的見地か
ら高まってきた。また、比較文学、比較思考研究が
進むに連れて、ヘルンの再評価が為されてきた。外
国人教師として赴任した詩人・批評家のエリザベ
ス・バレストリュリさんが、ヘルンの『知られざる
日本の面影』を読んで、これは詩人の筆になるもの
だという感想を洩らした。今、新館五階にヘルン文
庫が収まっている。島根大学、熊本大学とヘルンゆ
かりの三大学間で、インターネットによる情報公開
が行われると聞いている。ヘルン文庫設置のために
尽力された富山高等学校初代校長であり、富山の英
学の祖でもある南日恒太郎先生が、ヘルン文庫目録
の前書きで書かれているように、これがピエリアの
泉となって、詩興を湧き出させ、内外の諸研究を呼
び集う機縁となり、ひいては日本のハーン研究セン
ターとして位置づけられるようになることが願わし
い。

尚、ヘルン文庫に関しては1991年富山県芸術文化
協会発行の「とやま文学」第9号に特集が組まれて
いて、幾つもの興味深い記事が見られる。

ける十ヶ村の長であった郷村吏員の名称)であった
高岡市戸出の川合家が所蔵していた万治年間(1659
年)から明治に至る約200年間の加賀藩の農政記録
3,128点からなるもので、近世郷土史研究に不可欠
の資料である。資料検索は昭和2年に旧制高岡高等
商業学校に譲渡されたときの目録によっていたが、
探索に不便を感じる点が多々あり、検索効率の高い
目録の編纂が求められていた。資料の調査整理に併
行して編纂作業を進めていたところ、平成9年度教
育改善推進費を受け、新目録を刊行することができ
た。

同時に、平成10年度から文部省科学研究費補助金
「研究成果公開促進費」の交付を受け、目録情報と
文書自体の画像情報とをリンクさせたデータベース
の作成を進めている。

(3) 菊池文書

藩政時代十村であった東砺波群福野町の菊池家が
所蔵していた藩政初期から明治に至る約200年間の
農政に関する旧記や文書を整理したもので2,130点
からなる。

上記川合文書の史料を合わせることで砺波郡にお

ける加賀藩農政の大要を把握することのできる貴重な史料である。そのため、川合文書と同じく、科学研究補助金を受けてデータベース作成を進めている。

4) 鷹栖文庫

旧砺波郡鷹栖村(現砺波市鷹栖)の幕末以降昭和

20年代に至る約100年間の村政文書類1,600点からなる。

鷹栖村は加賀藩の穀倉といわれた米作地帯砺波の中心に位置し、典型的な散居村として、また、特殊な慣行小作権としての永小作権がいちはやく確立した村として著名である。